

## 2008年度やより賞贈呈式 スピーチ

金美穂

はじめまして、金美穂です。アメリカに20年近く住んでいて、いろんな方たちのつながりに恵まれて生きてきていると改めて思います。

日本ではシュプレヒコールとかありますね。私は教会で生まれ育ったんですけれども、よくハルモニたちが後ろでハレルヤー！とか叫んでいるんです。すごく活気付いて楽しいので、私がアメリカで習った一言をみんなとコールバックしたいと思います。

「Power to the people! Power to the sisters!」（みんなで一緒にコールバック）はい、よくできました！人々に力を、とブラックパンサーなどはオークランドで掛け声をしながら警官に見張られながら街を歩いていました。女性たちも立ち上がって、シスターフッドに力を、とやってきたんですね。

私日本語がちょっと不自由なところがありまして、博多弁と英語のバイリンガルではあるんですけれども、シスター弘田に通訳していただきます。

本日は前から長くお付き合いいただいている方に加えて、はじめてお目にかかる方々、両親、福岡の友人などこうして交流できることができ、とてもうれしいです。選考委員や数え切れないボランティアの方々の労力と貢献があって、この場にいられることに感謝申し上げます。こうして素晴らしい空間としてみなさんの労力が実っているということ、私がいさつする場を与えていただいたこと、深い愛を手にとるように感じるすることができます。

本当の意味での解放につながる運動は、知恵でも金でも政治力でもないと思います。では何か。人ひとりひとりとの関係、そのつながりひとつひとつが、世代や時、国境までも越えて、誘惑や弾圧にも強い、解放のための共同体の背骨を形成していると思います。共同体をさす意味での運動は難しいものでもなんでもなくて、強い愛と怒りを日ごろからともに共感しあい、お互いのために立ち上がって闘う勇気を自らの行動を通して確認しあいながら生きていく、人間が人間らしく正しく生きようとする、そういう空間であると思っています。

副賞でいただいた松井やよりさんの自伝のタイトル通りなんです。彼女はこのことをナンバーワンのメッセージとして意図されたんじゃないかと考えるんです。「愛と怒り・闘う勇気」。響きは単純で美しいですが、運動の魂の部分はここなんだよと、彼女もここにいて合意してくださると思えてなりません。この表紙、松井さんが飛び上がっているんですね。ここに「いろんな人たちとのつながりの中で生きてきて、なんか申しわけないくらい幸せ！」と書いてあるんです。私も同じ思いをさせていただいている気がします。ここにいるみなさんの顔、もう亡くなった下関のおばあちゃん、アメリカにいる女性たち、みんなの顔が浮かんできます。

私の思いと、アメリカでの活動についてお話しします。映像は言葉よりもパワフルなので、映像とともにお話ししていきたいと思っています。

長野の部落民の人びとの写真です。いつの映像かはわからないのですが、これは私にとってとても大切な写真で、自ら望んで住みたかったのではないその場で、母たち、妻たち、労働者たちが自らの権利を叫んでいる、これは私にとってとても意味があります。

次はオークランド、“文化を大事にする”という組織があって、そのお祭りです。自分たちのそれぞれの文化を自由に表現する。しっかりと自立したところで、みんなでその表現を分かち合う。一年に一回開かれていて、マルコム X を称えてマルコム X ジャズコンサートと呼ばれています。オークランド東部では日常的に、アフリカ系の人々が警察から大変な弾圧を受けて、銃で撃たれたりする。そのような厳しいところで、自分たちのアイデンティティを祭りとして表現しているところです。日常から少し離れて、みんなが休む、ほっとできる場なんですね。自分たちが誰であるか、喜びのうちに力強く肯定する場でもあります。コミュニティの人、主婦、高齢者、アーティスト、いろんな人たちが自分たちの関わりをしっかりとさせ、お互いの情報を確認しあい、互いを教育しあうとても素敵な場です。

狭山事件のことはみなさん知っていますか？アメリカと日本の民衆が連帯するとしたら、そういうところからつながっていかねばいけないと思うんですね。日本がどのように警察国家になってきたのかということ、それによって狭山事件が可能とされたのかということを理解する必要があります。アメリカも無関係ではないわけですね。

写真に写っているのはフィリピンの性差別と戦う女性のネットワーク、ガブリエラのメンバーですが、セクシズムに対する闘いから私たちが手を取り合っていく意味を、運動を通して確認しています。

次は、湾岸地域の日系コミュニティで行った「反戦節分」のお祝いの写真です。この女の子たちは沖縄出身の日系なのですが、「日系」は沖縄、在日、ラテンアメリカなどとても多様です。その多様性の中から共通の課題を探し出していくことがたいへん大切なことだと思っています。この女の子たちのようにアメリカで生まれた人びとにとって、節分は慣れ親しんだものではありませんが、日本の伝統的な文化を学ぶことも大事だと思っています。ちょうどイラク侵攻のときだったので、じゃあ鬼はブッシュとチェイニーということになり、鬼は外！（笑）

私たちのそれぞれの文化を取り戻すこともとても大切ですが、それだけでなく、共同体の中に息づいている長い伝統と文化の歴史を高齢者の人びとから学ぶこともとても大切です。グローバリゼーションの現在、若い世代の人びとがお互いがつながることがとても難しくなっていて、大変な喪失を、特に白人でない低所得者の人たちの中で強く体験している、だからこそ自分たちの共同体の遺産というものを大切にしていく。マルコム X ととても親しく、女性のノーベル平和賞にノミネートされたこともあり、平和のために闘ったユリ・コウチャマ、そういう人たちからの知恵をしっかりと受け取っていく。

次はカナダの先住民の親子の写真です。イギリスで、カナダ政府が先住民との約束を無視して、先住民の人びとの聖なる土地を占拠している。日本ケーブルというスキー会社が入ってきて、土地を奪い占拠している。それに対して、土地と資源を取り戻すために闘っているお母さんたちです。この問題に取り組みたいと思ったのは、私には義務、責任があると思ったからでした。日本の企業が金の暴力によって、前の世代に対して行ったのとは違う形での植民地化の加害者となっている。植民地化で苦しんだのは私たちだけでなく今も日本が続いているということに対して、私が黙っているわけにはいけないと思いました。

仕事を通して、北米のたくさんの先住民のコミュニティと関わりをもっていますが、彼女たちの生き

方から学んだのは、女性たちの大切な役割のことです。簡単な政治的な意味でのフェミニズムと片付けたくないんですが、男らしさを取り除くこと、もっと持続可能でもっと健全な、平和と正義に基づいた人間のコミュニティのあり方を彼女たちから学んでいます。先住民の人びとから学ぶということは、実は私たちの先祖も同じような見方を大事にしていたと思うのですが、共同体の中で与えられているものを大切に、自分たちで独占してしまわない。そういう生き方を先住民の人びとが今も大切にしている。そこから学ばなければいけないと思います。

沖縄で学んだ表現で、土地を先祖からあずかるのではなく「子孫からあずかる」という言葉がとても深いなと思いました。男性が考えるのは、占領、独占、支配。そうではない関わり方です。

次はサンフランシスコで行われた抗議デモの写真です。第二次世界大戦中日本軍により性奴隷にされた女性たちの確か 600 回目の水曜デモだと思います。アジア太平洋地域の女性団体やアメリカの韓国系の人々の団体の人々などたくさんの方が結集しました。韓国文化では白は喪を表します。私たちは目に見える形でハルモニたちやロラや他のおばあさんたちの思いと連帯しようということで白を着ています。

沖縄のカチャーシという踊りはご存知ですか？私はエイサーグループに参加していて、カチャーシのパワフルさを学びました。すばらしいのは、みんながひとつになる。あなた見る人、私やる人ではなく、みんなでやろうよ、そこがすばらしいと思います。写真は辺野古の米軍基地建設反対で集まった人たちです。

これらの写真をお見せしたのは、ひとつの文化をつくるのが運動をつくることになっていくということです。それが今危機的状況にあると思うのですが、私が生きながら行動しながら感じてきたことです。土地を奪うこと、軍による暴力、体と心、人間まるごと支配してしまうこと、特に女性に対するそういった意味での性的な支配、文化と言語を殺すこと、それらをしっかりと見せていかないといけないと思います。それを受け入れてしまったら自分も征服者になってしまう。私たちはそういった闘いを日常生活の中で引き受けていき、そうではないものをもとにつくるという積極的な働きが大事なのではないのでしょうか。

戦略についてなども話し足りないですが、いつでも私に話しかけてください。

この賞を今いただいたというのはすごいタイミングで、私は今出発点に立っている感じがするんです。今アメリカで被差別の日系の人たちが集まって、そこから自分たちのエンパワメントの道を探しているところなんです。ありがとうございました。

大藪順子

私なんかこんな賞を受けていいのかなと、非常に恐縮な思いをしております。金さんと同じように、もうすぐアメリカに渡って 20 年を迎えます。ですので私も大阪弁と英語のバイリンガルなんですけれど、私は大阪弁でいきますので、もし大阪弁の通訳が必要な方は、そういう用意が今日はないので、申し訳ありませんがお付き合い下さい（笑）。

私はアメリカでフォトジャーナリストの仕事をしています。日常いろいろな犯罪の被害者、加害者と向き合い、その現場に赴く仕事をしてきました。でも性犯罪に関しては、まさか自分にこんなこと起こ

るわけがないと高をくくっていた部分がありました。レイプ、強かんというのは、限られた地区で、限られた人に起こるもの、みたいな先入観、被害者はこういう人たちという先入観がとても強い人間だったと思います。それが一夜にして全く変わってしまったんですね。1999年8月9日に、自分の家で寝ているときに、ふと夜中にトイレに行こうかと目が覚めました。ベッドルームの横にだれか人が立っているんですね。ほんとうかそれとも夢を見ているのか悩んでいたのですが、その人影がどんどん近づいてくるとわかったときに、私はベッドから飛び起きて、逃げようとするわけですが、もちろん逃げられるわけもなく、そこで性暴力の被害にあったんですね。

それ以来私の世界は非常に大きく変わりました。本当にいろんなことがあったのですが、私が気づかされたことというのは私自身のことだったのではないかと思います。いかに私自身が偏見の強いものだったのか、いかにものを知らなかったかということたくさん学ばされてきたと思います。

自分の被害をもとに、いろいろな方々にお会いすることが可能になりました。結論的にいってレイプがあつてよかったなんて言うつもりはないのですが、あれがあつたから今の自分があると私は思っているんですね。あれがあつたからこそ会えた人たちがいて、あれがあつたからこそ出会えた人材があり、そういう人たちによって私は形成され再建され、被害にあう前の自分よりもっと好きな自分がある。ここまでこれたプロセスの中にいろいろな方が私の歩みにかかわってくれました。今日も授賞式に私の夫もアメリカから飛んできてくれましたが、私の写真のプロジェクトを経済的な形でサポートしてくれたのは夫といっても過言ではないんですね。本当に感謝しています。これを通していろんな方と会うことができました。

取材でたまたまオマハの黒人教会に行けといわれて、日曜日に取材に行かされました。そこで出会った牧師が、『順子にはそういう辛い経験があつたけれど、だからこそ順子には選択枠がある』と教えてくれたんです。体験があるからこそ、ベターになること（否定的な人間になる）もできる、それも選択のひとつだけれど、ベターになること（よりよく生きる）だって選択のひとつだということ。またその体験があるからこそ、ピティフルになること（自分のことをいつもあわれだと思って生活する）も、逆にパワフルになることも選択のひとつだと教えてくれたんですね。どちらかを選べと言われてもいいほうを選びたい。じゃあ私は何ができるんだろうか。あの体験があるからこそ、きっと私にしか言えないこと、私にしかできないことがあると思ったんですね。山秋さんも金さんも、ご自分の中で培われてきたものが、今のお二人を形成されたのではないかなと思って、同年代でこうして同じ賞を受けることができるということを実際に本当に光栄に思っています。

私は牧師の子ですが、親の話教会で聞いても、こっちの耳から入ってこっちの耳から出て行くだけで、困ったときの神頼みみたいな信仰しかない人間なんですね。行き詰ったときにぱっと聖書を開くみたいな。レイプという被害を受けたあの夜、友達の家で避難して、そこに置いてあつた聖書をぱっとひいたら、エズラ記10章4節「立ち上がりなさい。これはあなたの仕事です。勇気をもってやりなさい。私たちが協力しますから」ということが出てきたんですね。立ち上がりなさいと言ったって私は被害者なのに、私がする仕事なんて何もないじゃない、と思ったんです。この事件の責任は加害者がとるべきで、どうして私に何かする必要あるのかと。その意味は、黒人牧師と出会ったりいろいろな人たちと出会う中で、確立してきました。そのひとつとして、「STAND：性犯罪サバイバー達の素顔」という写真プロジェクトが実現しました。その中で出会った人たちを紹介し、その人たちから学んだことを

みなさんとシェアしたいと思います。

私は性暴力ということに関して本当に知らなかった人間です。自分が実際に被害にあうまで何も知らなかったから、多くの被害者の方々から話を聞いて、はじめて知ることが非常に多かった。同時にどれだけ私が恵まれて生きてきたかということを確認させられました。私は両親から愛されて育ってきました。愛されてきたという安心感の中で育まれてきたんですね。ですから愛されずに育ってきている人がいるということにまず驚きを感じました。ましてや自分の親から性的虐待を受けるとか、親戚から虐待を受けて育ってこなくてはいけなかった人たち。その人たちの苦悩、怒りという感情にふれることにより、私はたくさんのことを学んできたと思うんですね。

最初の写真ですが、オークランドに住んでいるダニエルさんという方です。私が出会ったときは彼女は25歳でした。スツールに座って足を組んでいる女の子が彼女ですが、これは5歳のときだと言いました。隣にいるいとこさんは無邪気な5歳児ですが、ダニエルさんはすでに無邪気さを失っている。写真の裏に、彼女の父親がずっと性的虐待をしてきたという事実があるんです。子どものころに虐待を受けると、楽しいはずの子ども時代がなくなってしまいます。子どもは精神的に成長するのが非常に早くなりますが、彼女もその一人だったんですね。

児童ポルノという話は日本でもみなさん耳にされていると思います。この方は児童ポルノの被害者です。ミネアポリスの売春街で父親が子どもの彼女の裸の写真をとって売りさばいていた。また彼女が13歳になったときに児童買春の対象にされはじめたんですね。彼女は18歳の時に家出をし、それ以来家には帰っていないんですけども、非常にインテンスなカウンセリングを受けられて、その後自らが売られていたストリートに戻って、児童買春を摘発するというすばらしい活動をなさっています。

実際の被害というのは数分だったり数秒だったり非常に短いと思います。でもそれが人に与える影響は本当に大きなもので、生涯抱えなければいけない場合もありますね。あるサバイバーが私に言ってくれたことは、加害者は3年から5年の刑を受けるけど、被害者は終身刑を受けるんだと。本当に当たっていると思いました。この彼女も5、6歳のときに一度被害を受けました。近所に住んでいてみんなからおじいちゃんと慕われていた人からでした。その虐待によってずっと拒食症という精神障害を抱えて生きてきた女性です。

ハワイの女性の刑務所に呼ばれました。そこのカウンセラーの方々が教えてくださったのは、その85%の女性は、なんらかの犯罪を犯して刑務所に入ってくる前に、性暴力、性虐待を受けていると。その人それぞれ、どうして自分にこういうことがおこるんだろうかと考えたときにどう理解していくか、それによって人の歩みはものすごく変わってくると思います。この写真をよく見てもらうと本当にいろいろな顔があって、どうどうとしている人がいれば、カメラを見てくださいと言っても絶対にカメラの方に向けない女性たちもいる。このうちの一人が、自分に起こったことはとても苦しい、あれを思い出すだけですごい怒りがこみ上げてくる。でもこの怒りをどうやってどこにぶつけたらいいかわからないと。そういった形で、自分らしさを失ってしまう人が非常に多いですね。

性暴力の被害者には男性もたくさんいます。アメリカでは女性の4人にひとりが、男性の6人にひとりが、なんらかの性暴力を受けているという調査結果が出ています。男性にも非常に多い被害です。ですから、いつまでも性暴力、性犯罪を女性問題としていてはなんの解決にもならない。やはり人権問題として取り上げていくことが必要ということ、また加害者のほとんどが男性である限り男性問題として

位置づけて防止対策をしていく必要があるのではと思っています。

最後の写真です。リーナさんというおばあちゃん、エレーンに住んでいます。ありとあらゆる精神障害を抱えたおばあちゃん、私はこのおばあちゃんに会えてすごくよかったと思いました。彼女が私に教えてくれたことは、ほんとうにすごいことでした。彼女は小さいときからずっと養父に性的虐待をうけてきた人です。おかげで多重人格だとか過食症とかいろんな精神障害を抱えて今も生きてらっしゃる。でもその中で彼女は胸をはってひとつ言うんですね、「私は自分の娘たちを守ってきた」。本当にすごいと思いました…。…普段はこんなに感情的になることないんですが（笑）。彼女のことを思い出すとああすごいなと、そういう話は写真の一面には絶対にのりませんけれど、それがどれだけ社会貢献であるか。アメリカでは一人の加害者につき平均 60 人くらいの被害者がいると言われていています。日本でも電車の中で痴漢する人は常習犯だと思っていいたいと思うんですね。ひとりの痴漢につき何人も被害者がいると思います。ひとりの人を加害者にしないということが、どれだけ大きな社会貢献になるか。そのためには家庭の中で子どもの自尊心を養っていく。やはり家庭という基本のコミュニティが崩壊すればするほどこういう犯罪は増えるのではないかと考えています。

最後に、元修道女の方から聞いたお話をさせていただきたいと思います。彼女は 38 年間ずっと修道女としてカトリック教会に仕えてきた女性でした。彼女は勤務している間に三回、ある神父からレイプを受けました。彼女はもちろん教会本部に訴えましたが、追放されたのは彼女のほうで、神父は違う国に移動させられて終わりというよくあるパターンで終わってしまった。彼女が私に教えてくれたことは、最高の仕返しは自分が幸せになることよ、ということ。本当にそうだなと思いました。怒りをずっと抱えて生きるというのはすごく辛いと思うんです。ものすごくエネルギーを使うことですね。自分らしく生きる、生きたい、その権利というのは、私たちひとりひとりにある基本的な人権ですけど、それを奪う権利は誰にもないんですね。ですから、どういうケースで、どういう性犯罪が起こったとしても、被害者のせいではないということをご自身自身が確認していただきたいと思います。どんなに短いスカートをはいていても、どんな人と飲んでいても、暗い道を歩いていたとしても、だからお前が悪いと言われる被害者が非常に多い中で、でもその加害者がその被害者の人権を奪うという選択をしたわけで、被害者の選択で被害にあうわけではない、私たちがそういう認識をしっかりとしていく必要があると思います。二次被害を受ける被害者が非常に多いということをご自分で、何かできないかと考えていたとき、こういう方々が私のところにきて、私もってほしいと。このプロジェクトに参加された人たちは、私からお願いしたのではなく、向こうからこられた方がほとんどです。その人たちの気持ちは、どこかで私と同じような苦しみをもって泣き寝入りしている人がいたら、あなたは一人じゃないということを書いてあげたい、私はだれかに手助けしたい、だれかにリーチアウトしたい、そういう気持ちからなんですね。被害者が求めているものは同情ではなく正しい理解です。この人たちのスタンス、立ち上がる姿は、見る人に対してどれだけ大きな希望を与え、力を与えてきたか。日本でもこのプロジェクトを日本人と一緒に形成できたらいいなと今夢をかためています。今日は本当にこのように素晴らしい賞をいただきまして、ありがとうございました。

これはアメリカ政府がつくった CM です。支援に対して、国がお金を出してくれないといけないと思います。犯罪被害にあうことで精神障害を抱え、普通に生活する、仕事をするのが難しくなる、生活保護を受ける人が非常に多いんですね。それが財政問題につながっているわけです。ですからアメリカ

政府は性犯罪被害者に対する支援に一生懸命お金を出そうという形になっている。日本もそうならなければいけないと思っています。日本では、性暴力被害者たちの多くが結婚をあきらめ、また子どもを産むという選択をしない人たちが非常に多いです。少子化の問題と考えたときに、性暴力被害者の支援を一緒に考えていかなければいけないと思います。

山秋真

山秋真です。私は石川県珠洲市の原発立地問題に約 15 年取り組んできました。少し難しいことを言うと、それを糸口としてその土壌と思われる差異の政治、差異化という問題にも取り組んでいます。差異化とは何かというと、私の理解しているところでは、人びとの間に恣意的な切断線を引いて、我々と彼ら、内部と外部、男と女、南と北のように、集団を分割することです。その線はどちらか一方に得になるように引かれます。

ここから具体的な話をさせていただきます。原子力発電所の予定地だった珠洲市を現場として、フィールドワークと関連裁判の傍聴に行ってきました。そして『ためされた地方自治—原発の代理戦争にゆれた能登半島・珠洲市民の 13 年』という本を書きました。副題の『原発の代理戦争』というのは、独自の表現です。本来なら、国の原子力政策をすすめる政治家や行政官、それに従う電力会社の人びと等、私を含め広く日本の住民が闘わせるはずの議論が、狭い原発現地に押し付けられてしまったから、現地での原発を巡る対立は代理戦争だ、というのが私の認識です。

きっかけは 93 年の珠洲市長選挙です。原発計画を巡り、熾烈を極めました。それを手伝う中で、長年かけて私自身にすりこまれてきた世界像が崩れさりました。それ以降、選挙や裁判や畑の手伝いなど珠洲へ通って記録を続けました。あの選挙で、自分が何を見たのか知りたかったからです。その間、主な出来事が四つありました。一つ目は 93 年 4 月の珠洲市長選挙。二つ目は珠洲市長選無効訴訟、これは 93 年 12 月から 96 年 5 月まで続きました。三つ目は 96 年 7 月のやりなおし珠洲市長選挙。これは 93 年の珠洲市長選挙無効という最高裁判決を受けて実施されたものです。そして四つ目は、珠洲市高屋町の原発予定地先行取得を巡る脱税事件です。この事件の展開は 93 年春から 94 年 12 月頃まで、裁判は 99 年秋から 2003 年冬まで続きました。珠洲の原発計画をめぐる選挙と土地というふたつの事件が、同時進行していたことになります。これら四つの出来事を個別に扱うのではなく、同時に扱うことで浮き彫りにされるものがある。むしろ、同時に扱わなければ複雑な現実を複雑なまま、問題を矮小化せずに伝えることはできないと私は思いました。とはいえ、それは私の手に余る大仕事でした。それでなくても次第に大量化するデータに困りあぐねていたのです。誰かがやらなければ、珠洲でおこったことは次第に忘れられ、別のどこかで同じような被害が安易に繰り返されるでしょう。ならばその仕事をするための術を求め、勉強しよう。そう思い始めた 2004 年、社会学者の上野千鶴子さんと出会いました。その門をたたいて現在に至ります。そこで社会学やジェンダー研究の知見に学びつつ珠洲の記録をまとめ、『ためされた地方自治—原発の代理戦争にゆれた能登半島・珠洲市民の 13 年』を昨年上梓しました。この本では珠洲市で不正選挙があった 93 年から、原発計画が凍結された 2003 年 12 月まで、さらに電力会社撤退後の珠洲の人びとの歳月を、珠洲市における草の根民主主義のうねりと、原発用地工作の実態とを軸に描きました。また原発問題の現地で、日々の暮らしがどのような影響を受けるのか、外人の

女性である私の視点も入れながら、具体的に伝えようとも試みました。原子力を巡る報道は各種ありますが、女子どもや年寄りなど、より弱い立場の声はすくいあげられないままでした。けれど女性であり子どもでもあった私には、そこにこそ問題解決の鍵があるように見えたからです。さらにそれは別世界のことでなく、自分と地続きの問題であることを読者にも感じてもらうため、「架橋アプローチ」と私が呼ぶ表現方法も試みています。表現者である自分は問題の現場によりそいつつも境界にとどまり、境界を行き来する中で変わっていく自分自身の姿も描くという方法です。これによって、実は同じ構造に組み込まれている「多数派」のひとりである私の困難も控えめに描きました。

ここで、珠洲市と珠洲の原発問題の概要をお話します。珠洲市では日本海側の地域を外浦、富山湾側の地域を内浦と呼びます。外浦にある高屋町に関西電力（関電）が、内浦のジキ地区に中部電力が、それぞれ原発建設を計画していました。私が通ったのは関西電力の予定地高屋です。全部で 70 数個の小さな集落です。

金沢から輪島経由で高屋へ来ると、右上から時計回りの順で景色に出会います。左下の写真の茶色い建物は、漁協です。左端の建物はきりこ収納庫です。きりこというのは能登地方の祭りでつかう山車をいいます。この収納庫は関電に頼んで作ったもので、建物正面に今もそのことが記されています。高屋で一番大きい建物はこのきりこ収納庫でしょう。

珠洲市にとって止まらない人口減と破綻しつつある財政は大きな悩みでした。70年代には農業に未来をたくそうと、国営農地開発事業を始めます。けれど場当たり的ともいえる国の農政に振り回され、逆に累積債務を 30 億円上乗せする結果に終わりました。そうした状況で 84 年、石川県知事は珠洲原発に意欲を表明します。86 年には珠洲市議会が原発誘致を決議しました。89 年 5 月、関電は珠洲市高屋町で原発建設の事前調査に着手します。けれど、住民の激しい抗議が一ヶ月以上続き、関電は調査の中断に追い込まれました。

ここで原発の仕組みと危険性について簡単にご説明します。お湯を沸かし、その蒸気でタービンをまわし発電するという原理は、原子力発電も火力発電も同じです。ただ、お湯を沸かす材料と原理が違います。原発ではウランという核物質をつかい、原子爆弾の原理を使ってお湯を沸かします。ウランと発電過程で生じる死の灰やプルトニウムは、放射線を出します。原発の危険性はこの放射線に由来します。放射線による障害には数十日以内に死亡する急性障害、数十年以内に死亡する晩発性障害、精子に遺伝子損傷がおきる遺伝性障害があります。遺伝子損傷にはこれ以下なら大丈夫という閾値はありません。

事前調査への抗議を続ける間に、珠洲市各地で住民グループが生まれ、珠洲原発反対ネットワークができます。91年にはこのネットワークが県議会議員一名を誕生させます。珠洲市、珠洲郡選挙区で自民党以外の方が当選した初のケースでした。続く市議会議員選挙でも三名を当選させています。一方の珠洲市は、89年から93年までの4年間で約8300人を原発先進地へ視察を送り込むなど、原発誘致に向け活発に動きました。電力会社も93年の85人をピークとする人員を珠洲の現地事務所に配置し、珠洲市と一体で原発立地活動を進めていました。なぜ電力会社が原発を作りたがるかと言えば、原発を建てれば建てるほど利益が増えるからです。背景には公益事業である電気事業の独占価格を設定するという日本の電力会社に特異な条件によってもたらされているからくりがあります。93年の珠洲市長選挙は、国、県、市、電力会社にとってかならず勝たなければならない選挙でした。原発いらないと訴える人びとにとっても、負けられない選挙です。負ければ、89年に中断した調査を関電は再開するでしょう。今度こ

そあらゆる手段を講じて調査を終了させることでしょう。どちらにとっても負けられない選挙。だからこそ、93年の珠洲市長選は熾烈を極めました。現職候補の側は、嫌がらせ、脅し、買収から、組織的な不正転入や、不在者投票の組織的な動員に至るまで、なんでもありでした。

右の写真は、この選挙のあとに珠洲原発反対ネットワークがつくった報告集です。当時の様子が少し伝わるかと思います。選挙カーに監視の車がついてきたのですが、現職候補がオーナー社長を勤める、当時珠洲市で最大規模の建設会社のバスでした。まわりは田んぼしかない細い道路、乗っているのは運転手一人だけです。この選挙のあと、買収と不正転入でそれぞれ一名が有罪にもなっています。現職候補がオーナーを勤める建設会社の社員と、元珠洲市議会議長でした。

これは外人攻撃のビラです。外人攻撃については後で詳しく述べます。こうして徹底的に票がほりおこされた結果、投票率92.41%を記録しました。

これは選挙期間中の珠洲原発反対ネットワーク事務所の様子です。昼間はビラまきや辻説法に出かけていたので、このように人が集まるのは午後8時過ぎです。

8月18日の投票日の夜、当選確定が出たのは、原発計画を進める現職候補でした。これはその後ネットワーク事務所で選挙を振り返っていたときの写真です。ところがしばらくして、票数が合わないことがわかります。市役所の隣の開票場へみんな駆けつけました。投票箱をあけて数えた投票用紙の数が、投票した人の数より多いという事態になり、徹夜の大混乱になっていきます。これが開票場の写真です。徹夜で抗議をしているところです。会場に入りきれない人が、廊下や下の階にあふれていました。抗議は翌4月19日の昼過ぎ頃まで続きます。今後の対応策を20日夕方に話し合うということでネットワークと珠洲市当局が合意し、翌4月19日の昼過ぎにいったん中断となります。

退去命令が出ています。市役所の裏には、機動隊の車も来ていました。ところが20日になってみると、珠洲市選管は話し合いでなく通告だけで票の再点検を強行しました。右の写真は異常を聞きつけて集まった人たちです。漁師の人も多いのでちょっとこわそうですけれど、割といい人たちです（笑）。それを遠巻きに見張る姿もありました。数日後には現職候補に当選証書が渡されました。そこで約二千人の珠洲市の有権者はこの選挙の無効を求めその年の暮れに裁判をはじめます。

珠洲市民が民主的な手続きを経て自分たちで原発計画の行方を決めようとしていたまさにその同じ頃、東京では珠洲の原発予定地をめぐる土地取引が進んでいました。この事実は1999年に発覚しました。原発予定地を売った地主が、脱税罪で起訴されたためです。約40年前に珠洲市を離れた後も、高屋町に広大な土地を持ついわゆる不在地主でした。これは99年4月の朝日新聞のスクープ記事です。それまで表面化してこなかった原発をめぐる土地の動きが、この脱税事件の後半で具体的に明らかになっていきました。この写真は結果的には脱税のために作られていたハーブ園です。用なしとなった今ではこのように放置されています。

さて、93年暮れに提訴された珠洲市長選無効訴訟は、約2年の審議を経て95年9月に結審し、12月に判決が出ました。この勝訴の垂れ幕をもっているのが、『ためされた地方自治』主要人物の一人、田中大輔さんです。翌96年5月に最高裁で無効判決が確定。7月にやりなおし市長選挙が行われました。けれど、裁判には勝っても選挙には勝てませんでした。原発計画を支持する候補が当選し、投票日翌日には市役所へ家宅捜索が入り、重役が逮捕されて辞任しています。このやりなおし選挙から約3年後、99年4月の統一地方選挙では、ネットワークが送り出している現職県議が石川県議選でトップ当選、続

く珠洲市議選でも6名を当選させ、議席数をひとつ増やします。そうしてめぐってきた2000年の珠洲市長選挙で、ネットワークは原発計画凍結の立場をとった新人候補と政策協定を結び、あえて側面支援にまわる形をとりました。中間層への支持拡大を巡って、原発の白紙撤回という旗を下ろす苦渋の決断でした。それでも現職候補の再選に終わります。むしろ票差は前回よりひらいたほどです。気がつく、93年の市長選以降原発いらないと訴える珠洲市長候補の票数は回を追うごとに減っていました。要因は三つ考えられます。まず外人攻撃、高齢化が拍車をかける人質有権者の問題、選挙の問題です。今日は外人攻撃についてお話しします。

原発は国策です。それにいやだというネットワークは珠洲市当局から異端視されていました。でもネットワークは孤立していませんでした。市外から少なくない人が応援にきていたからです。この人たちを攻撃する外人攻撃キャンペーンが93年市長選で顕著に見られました。特徴は市外から来た人を押しなべて攻撃するのではなく、原発いらないと訴える候補を応援に来た人を攻撃したことです。つまり外人攻撃キャンペーンは、原発いらないと訴える人びとの力をそぐために、原発を建てたい側が仕掛けたものといえます。この影響で少なくない珠洲の人びとが外人排除を内面化していきました。ネットワークも外人なしでやろうと、市外の人びとへの応援要請を控えるようになりました。もちろん一枚岩ではなく、スライドに示したような声もありましたが、主流にはなりません。なぜこれほどインパクトをもったのか、本書に詳しく述べているのでお読みいただければ幸いです。東京から遠く隔たった地、珠洲の住民が男女を問わず無意識に共有している劣等感を、この「田舎者と思って馬鹿にするな」という言葉によってたくみに刺激したからとも言えると思います。また外人攻撃の内面化は特に女性に顕著だったように見えるのですが、それは珠洲の反原発運動を担ってきたのは主に女性の力と男性たちからも言われながら、それでも女性をうっすらと軽んじる意識によって女性に植え付けられてきた劣等感があり、それをたくみに刺激され利用されたからと考えられます。結論的に言えば、外人攻撃キャンペーンはあまりにもたくみだったため、人びとはそれをしだいに内面化していったといえるでしょう。

このように珠洲市では原発いられないという声は歴史的とっていいほど盛り上がったのに、決着のつかないまま問題が長期化しました。そして膠着感や疲労感におおわれていた2003年末、電力会社の都合で珠洲の原発計画はなくなりました。珠洲市高屋町へ入る道路脇の崖の上に89年に建てられた見張り小屋は、2003年12月の計画凍結により2005年4月に解体されました。もう高屋に出入りする関電の車を見張る必要はないのです。

ここまで簡単ですが私がやってきたことをお話ししました。今日ここでご縁を得たみなさまに原発の代理戦争の複雑な現実を少しでも知っていただければ、その現実を生きる人びとの複雑な思いや経験を少しでも感じ想像していただけたら幸いです。私が出会った珠洲の人びとは、まったき犠牲者でも抵抗の英雄でもありませんでした。かわいそうな人でも強い人でもなかったんです。弱いのに強く、強いけれども弱く、傷つけながら傷つけ、怒りもしたし笑いもしました。原発の代理戦争を生きざるをえなかったことで、得られたものもあったと思います。その生き様は今も私の目に焼きついています。けれどだからといって、原発の代理戦争も悪くはないねとは私にはとても言えません。この代理戦争は、例えば山口県の上関で今も続いています。計画浮上から四半世紀。膠着したまま地域が停滞しつつあると聞いています。原発の代理戦争を許している、無知・無関心を乗り越えたい。やよりジャーナリスト賞をいただくことはその確実な一歩になると感謝しています。先達の姿に学び、かつこれからも初心を忘れず

目線を低く、じっくり着実に歩んでいきたいと思います。ありがとうございました。

## やより賞贈呈式 シンポジウム

司会 池田恵理子

お話の全体を大体しゃべりきっていただいたところがあれば、まだ残っているところもあると思いますが、まずは補足的なお話、また他の受賞者の方のお話をきいて、まとめたいこと、対話したいことなどをお話いただきたいと思います。質疑応答も受けたいと思います。まず金美穂さん、所属しているデータセンターの具体的な活動と、センターのこれからの展開や抱負をお聞かせ下さい。

金美穂

私が所属しているのはオークランドにあるデータセンターという NPO です。Non Professional Organization ではなくて(笑) Non Profit Organization ですね。この団体に勤めて 6 年近くなります。この仕事を通じて得た体験も、自らのコミュニティ団体を通して得た体験も交えて、さきほどスライドで紹介したので、データセンターに焦点をおきませんでした。社会正義運動体のインフラの一部を担う、情報提供の団体です。他の団体と同じく、共通のことを信じています。私たちが定義する社会運動に必要な不可欠な要素は何か。ひとつは当事者自らが発言する。なぜかという、当事者が日々直接不正義を体験しているわけですからエキスパートは当事者自身である。女性として受けた不正義は男性に代弁してほしくないわけですね。代弁するという筋合いも違うわけです。自らが自らを代弁していく、これは鉄則です。社会不正義は、もともとイデオロギーに基づいてそれを実践・導入にうつす組織に責任があると考えていて、それをずっと温存させる作用というのは、経済の仕組みがこうだからとかではなく、そこには意図が働いている。差別しようという意図でなくても、自分たちの富を自分たちに集中させたまま維持したいということ自体が抑圧につながっている。それを前提として、情報を当事者のコミュニティに提供しています。情報と一言でいうと、政府が持っている機密情報とか垂れ流し工業が隠している垂れ流し物質のデータだとかが頭に浮かぶと思うのですが、データセンターでやっているのは、コミュニティの中で体験を通じて蓄積してきた、辛さなども含めた知恵も情報の対象に入るというふうには、情報とは何かを再定義するアドボカシーを行っているんですね。アドボカシーを行う現場は主にアカデミアの中ですが、今私たちを困む教育組織というのは、当事者が歴史的に振り返ってみても明らかになるのは、情報というものは支配の武器として使われてきたということ。共同体が持っている知恵なども含めて、研究者は観察などを通して出版し、政府とかの思惑に使われていった。そういった歴史もあるので、研究をする側とされる側の中に、知識の生産の過程の中で、支配する側とされる側の力関係が再生産されるわけですね。ここを根本的に覆さなければ、私たちのデータセンターのような組織がいつまでもたっても必要になってくると考えています。データセンターが必要でなくなるというのがビジョンですから、コミュニティの中の情報であろうと、政府が持っている情報であろうと、企業の中の情報であろうと、自らがそれにアクセスするキャパシティをもつことがやはりゴールになるんですね。当事者を対象に長期にわたってトレーニングやエンパワーメントを行っているところです。先住民のパート

ナーが多くいるといいましたけれども、データセンターを通して知り合ったんですね。

司会（池田）

興味深いお話で、山秋さんがやってこられた活動とも刺激的につながりがあるなと思いました。次に山秋さん、日本の地域が内面のどろどろを抱えながら動いているということが具体的にわかるすごいお仕事でした。これからの展開や抱負をお話下さい。

山秋

今美穂さんがおっしゃったデータセンターの存在意義、これがなくなる日がくればいいなとおっしゃる問題意識は私も共有しています。でも本を出してしまった今は自分のポジショナリティは微妙というか、常に自省を続けなければいけないと思っています。

珠洲市は選挙や裁判もあり、いろんな人が取材にきていて、いい人もいっぱいいたしよく知らない人もいっぱいいるんですが、みなさんが通り過ぎていくんですね。いい記者の人も何人もいて、例えば原発に反対するために、予定地の暮らしを守ることが必要だ、畑を自分たちの力で守っていこうと、スイカの産直供給を高屋でやっていたんですが、仕事とは別の個人的なところで協力してくれる記者の人もいたようなんですが、東京やこちらに帰ってくると、そういうふうにちゃんと情報を生み出そうとしているのに、それが伝わってなくて、結果的に珠洲の現地の人たちがなんとなく...使い捨てにされているような気持ちが拭いきれなかったもので、それは今回自分でも本を出すときに大変肝に銘じたところで、ご批判をいただきたいんですが。知識の生産の過程で支配・被支配の関係が再生産されていく、それをなんとか変えたい。私はデータセンターのような組織的なことはできないので、自分で本を出すしかできなかったのですが、気持ちは情報の共有というか情報経験の中で培ってきたスキルや知恵とか、たとえ失敗した経験もとても重要だと思うんですね。同じようなことがまたほかでも繰り返されて。同世代に同じようなことを考えながら実践していらした方がいたというのは私にとってもすごく励みでした。

これからの展望としては、珠洲の原発問題を切り貼りではなく全体像として、複雑な感じをとにかく複雑だから易しくいうことはできない、おかしいことになってしまう、辛さや厳しさや苦渋が薄まってしまふように思って、なんとか全体として一回出したいということと、脱税事件によって原発予定地の土地の工作というのがかなり具体的に公の証言として出てきたので、もちろんそれでも黙秘とか記憶にございませんとというのがずーと続いたりするんですけど。それでも矛盾点とか、これは覚えてると言っているのにこのことについては記憶にないと言うという、証言を積み重ねていくことで浮き彫りになっていくことがあって、土地の動きをきちんと提出したいと思うんですね。

珠洲市の現地においても当事者性にグラデーションがあったのではないかと私は思っていて、グラデーションのより濃い...当事者の被害者の重度争いをしてもしようがないので争うつもりはないのですが、ただやはり聞きにくい声を聞くことが必要ではないかと思っているので、特に女性や珠洲で育った子どもにも照準を当てたい。サバイバーではないですが...かなり心の深手は深いので、親しい関係ができていて話ができていてもそのことはちょっとという感じの人もいます。でもそういう人の話を一番聞きたいんですけど、それになんとかアプローチできるか。あるいはできないのであれば、語れないこ

とがあるということをはっきりと表現できたらいいなと思っています。

司会（池田）

私たち「女たちの戦争と平和人権基金」では、入り口のところに日本軍による性暴力サバイバーの写真155人分を掲げていますが、ああして名前を出して顔をさらしながら、自分の体験を証言するということにいたるまでの被害者の方たちの大変な思いと闘いというものを、あまりに具体的に知っているので、私たちがやってきたことと大藪さんが今まさにやっていたことが非常にオーバーラップして、聞いていてせつせつと迫ってきたんですが。アメリカでの活動をずっとやってこられて、日本の現状を埋もれている現代の問題としてすごく大きな問題としてあると思いますが、そこを含めて今後の展望も聞かせていただければと。

大藪

お二人の話を聞かせていただいて、私たちに共通点がふたつあるなと思いました。ひとつは私たちひとりひとりに与えられている命、人権、自分らしく生きる権利を、どういう形で守っていくかというところで私たちが活動させてもらっているということがひとつの共通点。また被害者という立場に耳を傾けていく。被害者の声に耳を傾けないと現状は見えてこないですね。それぞれの問題の中で被害者、弱者の声に耳を傾けているという共通点。

私もプロジェクトをする中で、被害者の人の話を聞くことによって現状がわかってくる。被害者がいるという現状、いかにそれをポジティブに使うかということだと思っただけですね。被害にあってしまったけれども、その体験があるからこそ、その人にしか言えないこと、できないことがある。それに被害者の声に耳を傾けない限り現状が見えてこないことを考えたら、それだけ被害者の声は貴重で価値があると私は考えています。被害者ひとりひとりどのような体験をしても、それには意味がある。そういう人たちの声に耳を傾けていく、その人たちはこれから何をしていくのかということに目を向けていく。何かしましよとこっちは言っても、被害を受けたその人が考えて選択をして歩いていってほしいと何も始まらないわけですね。

第三者として私たちにできることというのは、種まきでしかないのではないかと考えています。でもその種がどういう心に落ちて、どういう芽を出して、どういう花を咲かせるかは、もしかしたら私たちが生きている生涯の中では見られないものなのかもしれないけれど、確実にそれが育っていけばすばらしいなと思っています。私たちができることは種まきでしかないとはいつも考えさせられています。

今後のことですが、今年の春に『性犯罪にあうということ』という本を出された小林美佳さんとつながることができまして、いっしょに日本での性暴力反対防止キャンペーンが展開できたらいいなと動き始めているところです。そのためには資金があると、企業まわりをしたり助成金に応募したりいろいろしているんですね。

さきほど写真を見せましたけれども、あれが日本人の顔でできたらいいなと思っています。この秋も日本のいろんなところで写真展をさせていただきましたけれども、アメリカ人とカナダ人の顔なので外国の話で終わってしまうのもったいない。日本人の顔でできたら、日本にもいろんな国の人がいますから、そういう顔でできたら、自分の身のまわりでもあるんだと気づいてくれる人がもっと増えるのでは

ないか、問題意識がもっと高まるのではないかと思います。

また性暴力加害者に限らず、人種差別にしろ何にしろ、加害者のことを考えざるをえなくなる、どうして人の人権を踏みしめることが平気のできるのだろうかと考えていく必要があると思うんですね。その背景には自尊心がないということにつながるのではないかなと考えているんです。アメリカ社会で母子家庭で育ってきた、または自分の父親がだれかもわからない、自分のアイデンティティがわからないという人が非常に多い。自分は愛されてこなかった、虐待を受けてきたという怒りの中で怒りをふつふつと抱えながら生きてきた人。そういう怒りが他人への暴力として出たり犯罪となって出てくる。そのようにしておこる犯罪は非常に多いと思っています。家庭の中の問題を私たちは受けとめていかなければいけないのではないかと思います。5年後の日本は今のアメリカみたいな危機感があって、アメリカは家庭崩壊が非常に深刻ですから、日本も実際的には母子家庭みたいな家庭は多いと思うんですね。お父さんの存在は非常に大切だと思っています。お父さんの存在は娘にとっても将来どういう人と結婚するかに影響する人物像ですし、男の子にとってもどういう男性になるかという大切な男性像ですから、お父さんの家庭の中での存在が見直されるべきだと思っています。

女性だけで何かをしようといってもリミットがあると私は思っていて、性犯罪にしても加害者のほとんどが男性である限り、男性が男性に問いかけていただかないといけないと思っていますし、性差別ではなく区別という問題で、じゃあ男は何ができるのか、女は何ができるのか、その立場立場でできることがあると思っていますので、日本でキャンペーンをしたいという夢を小林さんと温めているのですが、協力を求めていくのは女性に限らず男性もすでに協力してくださっているので。日本にもまだまだという人もすごく多いんですけど、草の根ではすごくいい活動をしている人もたくさんいるので、そういう力を横のつながりでつなげていくことがまず必要ではないかと、そういう形で何かができないかなと、それぞれにできることがあってそれを用いて生かしてやる必要があるのではないかと考えています。

司会（池田）

日本社会、あるいは日本の女たちに必要なものとか、気がつくことなどありますか。あるいはおふたりのお話に触発されてお感じになったことなどお話しいただけますか。

金

500 時間分を 5 分に縮小してお話します（笑）。おふたりのお話をお聞きしてすごくフレッシュで、本当にいろいろ感じていまして、さっき大藪さんがおっしゃった共通点に私もすごく共感しています。私自身生まれてきて、存在権自体をもたずに生まれきたのが最初の十何年。なのに存在しているという矛盾を解消しきれなくて、このもやもやをエネルギーに返還する能力も器もなく分析力もなく、もがいていたと思うんですけども、今ふりかえてみると、ああいう体験したのもわけがあったのかなと思えるんですね。特別永住権を一方的に略奪され日本に戻ってこられない身なんですけど、アメリカで身の回りで本当に struggle しながら生きてきている人たちとの愛やつながりを与えられた、そこから自分の過去と向き合う勇気ももらった。それがなかったらスピーキングアウトできなかったと思うんですね。スピークアウトはできたかもしれない、でもそれがノイズではなくて建設的なもの、ポジティブなぬくもりとかそういったものをオブラートみたいにつつんで出てくるものにはならなかったはず。10代の頃

グレートですが（笑）そのときと同じ怒りが出ていることには今も変わらない。松井さんの本のタイトルじゃないですけど、愛と怒りって、コインの裏表みたいなものですよね。ここのバランスを自分ひとりですぐでできる能力を育成させていただかないと、プラスのものとして出せないですね。だからスピーキングアウトするのを応援しなければいけないし、お互いができるようになるまでの過程を手伝わなければいけない。シスターフッドもすごく大切だと思うのは、それが不可欠なんですね。これは自らの体験を通して言えることなんですけれど。思いを再度痛感しながら、お二人の話がすごく浸透してきていたんですね。珠洲のことはパワフルなビジュアルも通してはじめて学ばさせていただいたんですが、イメージを見ていて、基本的に立ち上がって闘っている人間たちの姿は、国とか時代とかにとらわれずに共通しているなと思うんですね。私たちがキープしなければいけないスピリット、そういったシーンにすごく見えるなと思いました。弱くさせられている人たちは政治力も金も、何もないわけですよね。ものをうごかすことができる決断、原発をおくかおかないかの政策の決断も全く持たない人たちが、もたないから弱者になるわけですから、だったら何が残るのかといったら頭数とその魂の強さですよね。本当に尊い命が結集して大事にされて、はじめて立ち上がる原動力になるということだと思うんです。無数の抵抗というか、自分をつぶそうとする勢力、内面化された部分もあるので自分で自分をつぶしている部分もあったり、みんなばたばたして忙しくて、複数のアイデンティティや義務を抱えて生きているので、セレブレーションというのは身近な面で特にながしろになりやすいと思うんですね。でも実はそういうところがあってこそ、私たちがこうやってスピーキングアウトできているということを再確認させていただきました。

司会（池田）

山秋さんにもお二人のお話を含めて伺いたいんですが、なぜ珠洲の原発にかかわろうと思ったのかあまり述べられていなかったのでもちろねをお話いただけますか。

山秋

なぜ遠い神奈川から珠洲へというのはよく聞かれます。珠洲で神奈川から来ましたと言うとまず金沢と思われて。金沢でも、まあ遠いところからという感じなので、誰も神奈川から来てるなんて思いもしなかったようなんですが。

いろんな偶然が積み重なって出会ったというのがまずひとつあって。友達になって、選挙をやるから手伝えてと言われて。珠洲は過疎と高齢化の地と言われていて、頭数があればいいんですけど（笑）ないんですね。増える見込みもほとんどなく、資源として物も金も人もないというところで、情報も朝日新聞届くの翌日とかそういう感じですね。

珠洲に行ってみたら 93 年の市長選挙があって。それまで日本は民主主義で主権在民の国で法治国家だと学校で教わってきたので、それを普通に頓着なく屈託なく信じていたんですね。それが選挙って確か一番大切なものなんじゃないのかしらと思う中で、票がうやむやのまま命令がでたり、機動隊が来たり見張られたり。いかにもすごく悪い人のような、犯罪者のような扱い。主権在民というのは言葉だけだったのかしらという思いを重ねていく中で、それまで自分の中で持っていた日本のイメージがガラガラと音をたてて崩れ去ってしまいました。じゃあ自分はどんな社会に住んでいたんだろうというのを知りたかったのがひとつ。あと、選挙期間中に一ヶ月間くらい手伝いに行っていたんですけど、脅

しや嫌がらせとか数限りないことが、投票後のごたごたも含めていろいろあった。自分が一体何を見たのか、確かに色々な現象を見たんですけれど。怒ったり悲しんだり傷ついたり楽しいこともいろんなことがあって、それでじゃあ私は何を見たんだろうというのがやっぱりわからなくて、それを知れたかったというのがあったんですね。それで裁判や選挙に通い続けたんですけれど。本にまとめていくにあたって、少し時間も経過していきますし、完全にこちらで書いていますので地理的にも離れて距離感も持てて、少し渦中にいたときの混沌としたところから、何かがふつつつと醸成していく感じというイメージなんですけれど。私自身ももちろん外人攻撃にもさらされて、自民党の議員に泣かされて帰ってきたりして、選挙事務所でしくしく泣いていると士気が下がるからやめろと言われて（笑）。そういうことを言うのはリーダーで人を引っ張る人で、他の人は慰めてくれるんですけれど、そのリーダーは立場上そうは言うけれど、この人はもう仕事できないなと思ったら気分転換に山の方とか人の少なそうなところにピラマキに連れて行ってくれたりして、ちゃんとフォローはしてくれるんです。

法治国家で主権在民で、近代国家としての日本、自分自身その一級市民として（笑）普通の人みたいに大切に尊重される人だと思っていたのが、あまりそうじゃなかったみたい（笑）。とりあえず原発に何か言うと少なくとももうだめみたいな中で、そこにこだわっていたのはやっぱり、使い古された感じもしてこの表現は借りものの言葉のようなんですが、生きづらさみたいなものをやはり感じていて。生きづらいというよりも、借りものの人生を生きているような。その頃まだはたちそこそこなのでこんなこと言うのも生意気なんですけど、とても実感がなかったんですね。生きることの実感というのがはたちそこそこであると思うほうもちょっとどうかしているのかもしれませんが、それにしても...ない。珠洲でそれがあったんですね。だから代理戦争も良かったねとはならないけれども、その中で奪われながら、いや私はそれがほしいと言って主体的にならざるをえなかったのかもしれないですけど、自分の人生を生きている人たちがいて、その情熱にたぶん惹かれていった。93年の珠洲市長選挙には人がいないのでとにかく人を連れてきてと言われて、妹や友達を連れていったんですけれど、大学時代の同期はフォトグラファーになると就職が決まっていたんですけれど、珠洲から戻って一週間で内定を断って、勉強したいことがあると言ってアルバイトをしてお金を貯めてフィンランドに渡っていますし、妹は大学で物理学をやっていたのですけれど、大学院に進学して太陽電池の研究をしています。私は珠洲から目が離せなくなって選挙や裁判に通ったりして。つまり、少なくとも三人の当時若かった女性が人生を変えられたんですね。それだけのインパクトがほんとうにあって。

本になったのも、私ひとりだけの力ではなくて。私は心ひそかにチーム珠洲と呼んでいるのですけれど、編集社の方をはじめ、今日きていただいているヒヨキさん、大学でむりやり押しにかけている上野千鶴子先生、地元の方、大学時代の先生。私に巻き込まれていった人たちかもしれないんですけど、いやだったら断れたはずだと思うんですけれど、巻き込まれてくれた人たちがいっぱいいて。やはりそれは珠洲の吸引力みたいなものがあったのかなと思ってるんです。

司会（池田）

とてもよくわかりました。

大藪さん、日本で性暴力被害の方たちの運動をしていこうというときに、アメリカと日本の女性たちの違いや難しさなど、どう感じてらっしゃいますか。

大藪

被害者について言えば、基本的なかわりはないと思っています。人それぞれ、自分に起こったことについて、どういうふうに理解して、どういうふうに消化して、どういうふうにそれから歩いていくかはその人が決めることですし、そこからの歩みはだれがどうの、被害者だからどうだ、アメリカだから日本だからどうのと言うことはいえないと思うんです。ただ、日本の場合は世間体というものがありますよね。すごく気にしなければいけない。声を上げたくて、上げられる状況にしながら、でもまわりにそんなんやめとき！と止められてしまう。そこで被害者の自尊心がさらに傷ついてしまう。やっぱり私は声を上げるに値しない人間だ、存在しないほうがいいんだと思わされてしまう現状が、アメリカより強いのではないかと思います。

アメリカもそうですが、日本もアダルトビデオの生産量が世界トップですから、女性に対する暴力が常識化されつつある。非常に深刻だと思います。先日も韓国で12歳くらいの子どもたちが12歳の女の子を集団レイプした、どうしてそんなことをしたのかというアダルトビデオを見て同じことがしてみたかったと。子どもが何をインターネットで見ているのかということ、親が監視するのではなく興味を持つことが必ず必要だと思っています。そういう状況はアメリカも日本も変わらないのではないかと思います。

ただアメリカの場合、被害者支援のチームができています。警察に通報がいったら警察がきて、被害者を救急病院に連れて行ってくれます。被害者が自分で行ければ行きます。そこでレイプ検査というのがあって、医療が被害者の体から加害者のDNAなど証拠を検出します。それから刑事が動きます。私の場合は刑事さんが夜中の二時か三時かわからない状態でしたが、カウンセラーの人を連れてきてくれました。福祉関係とそこでつながっているんですね。赤の他人の全く知らない人のために、カウンセラーが夜中に駆けつけてくれて、今夜起こったことはあなたのせいじゃないのよという言葉に私に聞かせてくれた。それは被害者にとってすごく心強かったですね。そういう対応チームがある。また警察で証言をしなければいけない場合、その場に刑事、もう一人の刑事、個人で雇うもしくは州が与える弁護士が来てくれます。思い出したくないような話を何回も何回もするとさらにトラウマを受けますから、それを避けるために一度で済むようにという対策をしてくれます。そういう形で対策をされている。

アメリカの場合、州や国が支援にお金を出している。支援者たちのために全国で毎年コンファレンスがあって、国がサポートをして、支援者の人たちが勉強会やネットワークをしたり。州レベルで、州政府がお金を出すということもあります。

日本では、加害者対策としては刑務所内のカウンセリングなどに国はお金を出しますが、被害者のためには一銭も出していないわけですよ。被害者がカウンセリングに行きたくても、自分でお金を出して行かなければいけない。なんで私が悪くないのに犠牲を払わなければいけないのかということになりますね。また警察も取り扱ってくれないというのは日本でもアメリカでもよくある話です。対応が非常に遅れるわけというのはそういう体制がないということです。意識的な問題も今すぐ改善しなければいけない問題ですけど、どのような形でそれが可能かということは私も今模索中で、どういうアイデアを提供できるんだろうかと動こうとしているんですけども、そういう対応チームがあるかないかだけでも被害者の心のケアというのは変わってきますね。

日本で被害にあった方々、小林美佳さんのように声を上げていくという選択をする人もたくさんいら

っしゃいます。日本でこんなことをしても参加する人なんていないよと言う人が多いんですが、実はもう十数名、名を上げて下さっている方がいて。講演会に行くたびに日本でするときには連絡下さいと連絡先を下さる人がいるんですね。ですからそれだけ、被害者が声を上げたくても上げる場がない。それはアメリカも同じだと思います。プロジェクトに参加して下さった方々は、そういう形で声を上げる、突破口を探しているというか、いつももやもやしている状況からいかに自分を解放するかという突破口を探している人が多いのではないかと思います。日本ではさらにそうではないかと。だれにも言えない、何か言ったらまたあんたが悪かったんやとか言われるんじゃないかと怖い。一度言われているからもうそんな思いは二度としたくない。だから私は口をつぐむ。忘れよう忘れようとするんですが、実際起きていることなので忘れようなんて無理なんですね。じゃあ実際起こったことにいかに付き合って歩んでいくかというのが課題になると思うんですが、そういう中で被害者の人たちが安心できる場所が日本にはない。自助グループに求めていたりという人が非常に多いと思いますが、も自助グループさえ見つけるのに一苦労。自分にあうカウンセラーに当たるまで何十人のカウンセラーを体験したとかよく聞く話です。被害者の安心できる場づくりがまず第一優先なのかなと思ったりしますね。

司会

会場からご質問、ご感想、お願いします。

会場

今日は本当にありがとうございます。山秋さん、金さん、大藪さん受賞おめでとうございます。山秋さんとは上野千鶴子先生ゼミですずっと一緒にいて、本を読んで、人間を、自分がわからない経験をしてきた人を、そのまんま見て、だれかに伝えたいという意志に満ちた人だなと、ずっと尊敬申し上げております。金さんはパワフルな方ですね。これくらいパワフルだと帰ってから幸せでいれるような気がするのです。これをうけとって帰りましょう。大藪さん、私もレイプのサバイバーです。12歳のときに男性からレイプを受けました。今大学院におります。そこでレイプサイバイバーの研究をしています。仕事という言葉、ぴったりと思いました。また何よりの仕返しというのは、私が幸せになること、まわりの人も幸せになることだと思います。ですので、大藪さん、もしよければ私もプロジェクトに参加させてください。（会場拍手）被写体にぜひらせて下さい。私今まで、自分で写真、誰かにとってもらうことがこわくて、とってもらうことなかったんです。だから、とってほしい。よろしくお願いします。

大藪

ありがとうございます。ぜひよろしくお願いします。

会場

本日はおめでとうございます。自分自身が今までやっていることとつなげていかざるをえず、今日はこの質問をしようと思っていました。何度か金さんが使われた言葉で、当事者性という言葉。また山秋さんのポジショナリティ、当事者性のグラデーションという言葉が使われて、そこに私の研究との共通点を見出しているのですが。当事者が自分について語るということが、本当にこれまでなされて

こなかった。権力の言葉で私たちの経験が語られてきてしまったという事は確かにあると思います。ですから私が私を語らなければならないという問題意識に、みなさん立ってらっしゃるということで、とても共感するんですが、同時に私自身が研究者として抱えている問題として、私は確かに私を代弁することはできるんだけど、じゃあ私に似ている人のことをどこまで語っていいのだろうかという問題を常に抱えています。そのときに私が理想とすること、前提とすることを私に似ている人に投影してしまうという、被害者であったはずの私が加害者に転じてしまう瞬間につねに向き合いながらアカデミアの中でやっているのが私の仕事で、だから私はアカデミアの主流には絶対になれないのですが、今日は私の問題点をここでお話することで、みなさんに示唆をいただければと思いました。

## 大藪

私はジャーナリストたちから、ジャーナリストであることと、被害者であることの一線を越えていると批判されました。感情移入しては正しくことを伝えることはできないと。いや私は可能だと思ったんですね。私が会ってインタビューする被害者との間に、私は一線を引きます。感情移入しないように。じゃあ一線をひくときにどうするかというと、絶望の中にいる被害者の人にも明るい未来があって希望があるんだって、私が信じないとそういう一線は引けません。こんなに辛い思いとこんなに大変な体験をしているけれども、その人だって生きる権利、幸せになる権利があって、その人だって幸せをつかむときがくるということを私は信じるんですね。じゃないと一線はひけないとおもいます。正しく事を伝えるというのは私たちジャーナリストの仕事です。ただ、いいこと悪いことというのは、はっきりしていくべきではないかと。今までジャーナリズムの中で、あまりにあやふやにされてきてしまった。例えばそのおかげで、加害者の人権ばかり守られている状況が作り出されてしまっている。加害者が未成年であった場合には、被害者の顔写真ばかり新聞に載ってしまって、加害者の名前も何も公表されずに隠されている状況ですね。ですから何がよくて何が悪いかということ、明確にしていく必要があるということ。それも一線を引くことの手助けになるのではないかと考えています。

## 山秋

私もそこはすごく迷うというか不安というか、日々考えるところですが、私に似ている人をどこまで代弁できるのか、結論的に言えば、代弁はたぶんどできないと思います。自分のことは代弁できる、でも似ている人のことを代弁することはできない。でもだからといってひとりひとりが孤立する必要はないと思うんですね。代弁するのではなく私が見聞き体験したことを証言することで、私に似ている人の言葉を促したいというのがあって。かわりに言ってしまうと、ちょっとおこがましいというか、二次被害みたいなことになってしまうかなと思って、できるだけ避けたいと肝に命じています。ゆっくり時間をかけて議論し考えていきたいところです。今大藪さんがおっしゃっていた、感情移入をしてはいけないんじゃないかということですけども、私は最初の原点が珠洲だったので、代理戦争の地で決戦の選挙というところに最初に行ってしまったので、すごい報道合戦だったんですね。そこで見ていて今思っているのは、公平とか客観的報道と言われて新聞は公平に書かなきゃと言うんですけど、公平に書かれているはずのものがどう見ても体制側、国策を援護しているようにしか見えない形になっているんです。そもそももっている資源が違って、市や電力会社は人権費も出て給料もらいながらやっていて、税金が

投入されて、私たちが払った電気代が珠洲にまわって、きれいなピラやすてきな講演会や送迎のバスつけてみたいなのをやっているのに、私たち、というか、それに反対する人は、人は少ないしだれもお金をくれないし、むしろ自腹切ってやんなきゃいけないし。誌面の上でいくら公平を装ったところで、現実には公平じゃないんだから。誌面の上で公平な条件であるかのような顔をして、そこで平等なルールでゲームしましょうといっても現実世界は平等ではないとしか思えない。そこで公平、公正、客観性をいうのは、マイノリティを、珠洲の人の力をより削いでいるような気がしています。ですから対象に同一化することからスタートしてもいいのではないかなと自分では思っています。

金

非常に刺激的で、私もいつも考えさせられていることに関する質問でありがとうございます。どこまで代弁できるのかという投げかけがすごく印象に残ったんですね。私自身も当事者としての立場は持っているにしても、データセンターの人間としてはテクニカルアシスタンス。当事者ではないんですね。この立場をわきまえないと、この仕事はできないんです。自分の中で整理しなければいけないことがあって、あるコミュニティがこういうゴールがあるんだとその路線に乗ったときに、運動というふうにとらえるのであれば、運動の実践であって、どこまで代弁できるのかということは、まずひとつ考えなければいけないのは、現場がどこなのかということだと思っただけですね。実践の場であつたら、理論の場、理論を追及する学問の場、思想の場とは異なるんですね。その中でスピーキングされていること・声は、ちがう要素をもって、ちがう働きをもつと思っただけです。あまり抽象的だと日本語が余計わからなくなるんですけど、情報というのは常にいいこと悪いことをはっきり伴わなきゃメッセージにならないというのは、本当にその通りだと思っただけです。いいこと悪いことははっきり言わないからといって、じゃあいいこと悪いことがないのかといたらそうじゃないんですね。情報というものはメッセージとなってこの世に出るときは、必ず何かの結果をもたらすんですね。それは何か物質的な、または目に見えるような影響を誰かにもたらす。情報が世界に出るときは、だれの思惑によってどのような形でだれがパッケージしてだれの情報なのかということ全部頭でぱぱぱぱってチェックリストをしなければいけないことだと思っただけです。とくにリサーチャーの立場であつたら、理論の場でなく人間が住んでいるコミュニティの場で情報が出るということであれば、それが特に適用されると思います。客観性についても、私自身は客観性って一体なんなんだろうと思っただけですね。アカデミアの中で、またジャーナリストの世界、ソーシャルサイエンスの世界でも、当事者が当事者の研究をして考えを出すなんて考えられないと、データのインテグリティが疑問視されるんですね。もういつもです。だから戦略的に、レポートを出したら「データセンター」の名前で出して、当事者の顔を隠したり。戦略なんですよ。ソーシャルサイエンスでもフィジカルサイエンスでも、パラダイムの一部として盛り込まれているということはすごく痛感するんです。でも客観性を唱えることによって、当事者の声を抹殺できたという効果が歴史的に見えるから、これはパラダイムの批判を伴わなきゃいけないんじゃないか。そもそも客観性って伴うのかしらって思っただけです。だって客観性を唱えながら、そういうパラダイムの長に勤まっていた人たちというのは、他者だから研究できるという魂胆がなかったのかと言ったらなかったわけじゃないですよ。現にリサーチや情報というのはちゃんと占領のために使われてきた歴史があるわけですよ。

## 会場

世の中が厳しくなればなるほど感情移入したジャーナリズムや報道があって当然じゃないかと思えます。

## 大藪

当然そうだと思います。客観性という問題、それも結局は言い訳でしかないのかなといつも感じるんですね。新聞社の中での人間関係でできる、目に見えないポリシーがあって、こういう話は出すけどこういう話は出さないというのがあります、やはり人間がやっていることですからそういうことがあって当然ですし、感情移入した記事があって当然だと思います。お前は感情移入しすぎだと批判されたときに、私がそれに反対して言ったことは、いや私には体験があるからこそ、水面下に潜んでいる話を表面化できるんだと。私にしか話せない人だっている。その体験をどうしてツールとして用いないのかという私のアーギュメントだったんですけど。そのおかげで200人以上のサバイバーの人たちが連絡をくれる。日本でもいろんな方々が、家族にもしゃべったことのないことを赤の他人の私にしてくれるんですね。それをツールにするというのは悪いことではないと思っています。

## 金

情報や事実の伝達はありえないわけではないと思うんですね。でもお二人の話を聞いていると、これはただの事実の情報伝達の領域を超えていて、もっともっと大切なメッセージがそこにはあって、人間がこうやって生きてこうやって struggle してるんだよ、というヒューマンストーリーが伝わってきて。ジャーナリズムの、私にとってはパワフルな効果はそれだと思うんですよ。でもそれとは別で、本当にドライなデータの情報の伝達をもっと適用したいときもある。そこには区別を感じました。

## 司会

松井やよりさん自身は朝日新聞で記者生活をしていましたけれども、松井さんの視点は本当に一番弱者のところに身をおく、一番弱き者の立場からものを見て、何が問題でどこに責任があるのかを追求していく。その姿勢に関しては全然ぶれないで、ずっと記者をされてこられました。仲間の記者からは偏っているとか客観的でないという声はあったようですが、そのジャーナリズムの姿勢は大事なところだと思います。権力に対して批判の精神をもち、一番困っている弱い者の立場に立って報道するというのは、ジャーナリストとしては基本だと思うんですけども、今日はこのような三人の方々はやより賞を受賞されたのは本当にすばらしくびっくりしたことだと、今さらながらに思えます。

二回目のやよりジャーナリスト賞を受賞された山本さんがいらっしゃるので一言。

## 山本

山本柚です。おめでとうございます。三人のお話を聞いていて、自分が取材活動で出会った原発立地計画に反対した漁師の方とか、友人で在日朝鮮人の弁護士で入居差別事件を闘っている友人のこととか、児童性売買のことや、いろんな知り合いや友人の顔を思い出しました。私は韓国の在韓米軍によって強かんや交通事故などの被害にあった被害者の支援をしている NGO の高維京さんの取材をしまして、週刊金曜日に連載させていただきました。さきほど金さんから活動家として立場をわきまえないと、と

いうご発言がありました。高さんのときも取材に苦労しまして、イメージとして安易には考えていませんでしたが、現場に行ってお話を聞いてまとめられるのではないかと期待をしていました。彼女は当時、米軍基地が拡張することによって追い出されてしまうテチュリという村で活動していきまして、彼女に村人は今どんな調子なんですかと聞くと、自分は代弁できない、とは言わないですけど、それは本人たちに聞いてくれと。一度も代弁してくれなかったですし、取材はどどここいったほうがいいよというような当事者のことも一度も教えてくれなかった。最初はこっちのエゴもあって取材しにくいなと、かなりしんどかったのですが、二年間付き合ってたんだん輪郭がみえてきて、彼女が言った意味は、自分が勝手に住民の状況を代弁してしゃべったことが、流れていってしまいますよね。それがどういう意味をもたらすのか。活動家としての自分の分というか。当事者は当事者として思いがあるわけで、自分がいくら活動家だからといって、でしゃばってしゃべらないという一線を引いている。一線を引いているといっても、今でも村人から信頼されていて。子どもたちのケアとか。一万五千人の機動隊がきたというのを子どもたちも経験している。書かないでくれと言われて書いていないんですが。田植えを手伝ったり祭りにでたり、日常的な付き合いというものを、闘争が終わったとされる今でも続けられてるんですね。テチュリという村と高さんとこれからもかかわっていけたらと思っています。

テチュリの人たちは来年9月に新しい住宅団地ができるということで、そこに移住するために仮のアパートに住んでいます。200世帯くらいが44世帯になってしまい、100人弱。なんらかの形で農業にたずさわっていたのにそれがなくなってしまって、農業を再開できた方は二人しかいない。これまで車で5分で田んぼに行けたのに、保証金の額が少なく一時間半かかる遠くの田んぼで、40代半ばの方が始められている。まわりからは農業しんどいからやめたほうがいいんじゃないかと言われても、しんどいけどやるって。こういう境遇においやられたことを忘れないために、反抗心、怒りを持ち続けるためにやるんだと言われて。その言葉に人が誇りをもって生きるとは何かを教えられました。

司会

ありがとうございました。やより賞、やよりジャーナリスト賞があっただけによかったと思います。素晴らしいお話を皆さんがしてくださいました。これからもさらにご活躍ください。